

大聖寺藩の参勤交代

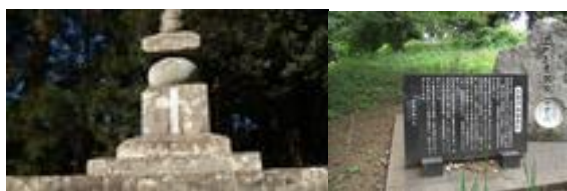
(1) はじめに



本稿は、2013 年 6 月 9 日（金）、加賀市立図書館ふるさと歴史講座「大聖寺藩の参勤交代」における郷土史家・山口隆治氏（本校元教諭）の講話をもとに編集したものである。

「大聖寺藩の参勤交代」に関する史料はきわめて少ない。そのような中で、山口隆治氏は『加賀藩史料』『徳川実記』『続徳川実記』『加越能文庫』などをもとに、「大聖寺藩の参勤交代」の詳細についてまとめられた。山口隆治氏のご努力により、大聖寺藩が初代藩主・利治から 14 代藩主利邨までの約 220 年強の間に合計 181 回の参勤交代を行っていたことをはじめ、「大聖寺藩の参勤交代」にかんするさまざまな事実が明らかになった。なお、大聖寺藩参勤交代の歴史については、山口隆治氏著『大聖寺藩制史の研究』（桂書房、2016 年 10 月刊）で詳しく知ることができる。

(2) 参勤交代とは何か？



「参勤交代」とは、江戸幕府が大名を統制するために、全国に約 300 人いた大名を江戸に参勤させた制度をいう。「参勤交代」の「参勤」は、諸大名が江戸の将軍家に挨拶に行くことで、正しくは「参観」という。また「交代」とは江戸から国許（もと）に帰ることで、「就封」と呼んだ。大聖寺藩や金沢藩の藩主はこの「参勤交代」によって、一年ごとに江戸へ行き、一年間もの間、江戸で生活しなければならなかった。また大名の妻子の江

戸居住も義務づけられていた。したがって、大聖寺藩や金沢藩の立場からすると、「参勤交代がなかったら、どんなに経済的に楽だろう」というくらい、莫大なお金を要した。

先生によれば、「大聖寺藩は本当にかわいそうだったと思います。」というほど、費用がかさんだ。領内の農民や町人からせつかく集めた藩の財源も、その多くを「参勤交代」にともなう費用に充てなければならず、本来行うべき国許の事業に十分な予算を組むことができなかった。

「参勤交代」のはじまりは、1615（元和元）年に大坂夏の陣で豊臣家が滅亡した後、諸大名がきそって徳川家康に会いに行ったことである。また、さらにその起源をさかのぼると、鎌倉時代の御家人が務めた京都大番役などの軍役負担にいきつく。

「参勤交代」は、1635（寛永 12）年の「武家諸法度」の改定で制度化された。それにより西国大名は 3 月末～4 月初めに江戸へ行き、反対に東国大名は同じ時期、国許へ帰る（次の年はその逆）というしくみが出来上がった。ただし、すべての大名が 2 年に 1 回江戸に行っていたわけではない。

実際には、隔年参勤だったのは 175 家であり、その他半年交代（関八州の大名）が 27 家、水戸藩や老中を務める大名などは常に江戸詰め（定府）であった。また遠隔地の対馬の宗氏は 3 年 1 勤、蝦夷地の松前氏は 5 年 1 勤（のち 6 年 1 勤）という特例もあった。さらに、交代の時期も外様大名は 4 月、譜代大名は 6 月か 8 月というルールも定められており、大聖寺藩や金沢藩の「参勤交代」はたいてい 4 月に江戸に着くように、実施されていた。しかも 1 回 1 回、江戸幕府にお伺いをたてることになっていたから、大変な労力が必要であった。

大聖寺藩の「参勤交代」は平均 270 人規模であった。これだけの人が今の東京まで歩いていったわけであるから、大変大がかりなものであった。

（３）大聖寺藩の参勤交代には約３億円かった。

大聖寺藩の本藩である加賀藩は、日本一の大藩であった。全国の諸大名の中でももっとも豪華な「参勤交代」をしたことで知られる。加賀百万石に恥じないような伝統と格式に裏付けされた華やかな行列は、沿道の庶民に威厳を示すことになった。そして加賀藩百万石が江戸幕府に忠誠を尽くす姿勢を示したことは、徳川幕府の権威を一般庶民に見せつける効果もあった。幕府は「参勤交代」によって最大の外様大名であった加賀前田家の財を浪費させ、前田家の勢力蓄積を防ぐことをねらったのである。



←加賀藩上屋敷跡にある東大赤門と下屋敷があった現板橋区「加賀公園」

加賀藩の「参勤交代」は毎回約 2000 人から 4000 人規模で行われた。またこの回数は武家諸法度の第二条で正式に制度化された 1635（寛永 12）年から廃止となった 1862（文久 2）年までの 229 年の間に実に 190 回を数え、毎回 5～6 億円の費用がかかった。特に 5 代藩主・綱紀の時代には 60 回も行われ、加賀藩初代藩主・前田利家の時代には 150 億円分あったという資金はなくなり、綱紀の頃には、ついに赤字に転落したという。



←大聖寺藩上屋敷跡地

大聖寺藩にとっても「参勤交代」は大変大きな負担であった。「参勤交代」の規模こそ約 270 人と小さかったものの、加賀藩の支藩としての格式を示したいという見栄も当然働いたことであろう。毎回殿様の台所・便器・風呂桶を持って歩くことは、本藩・加賀藩と同じであったから、加賀藩に比べて相当割高についた。文政年間にはその費用は銀 210～20 貫（現在の約 3 億円）であった。

「大聖寺藩の参勤交代」は合計 181 回（参勤が 89 回、交代が 92 回）で、藩主が病気であったり、大聖寺の町が水害に襲われたとき以外は毎年行われた。

（４）大聖寺藩の参勤交代・全部で１８１回行われた。

大聖寺藩が行った全 181 回の参勤交代の中で、もっとも豪華だったのが 1822（文政 5）年、9 代前田利之（としこれ）の時のものである。

大聖寺藩の参勤交代の平均は 270 人であったが、このときはなんと 397 人もの大行列を行った。その理由は、1821（文政 4）年に、大聖寺藩の宿願であった 10 万石への高直しが行われたからである。その際には途中糸魚川の宿場に泊まったとき、十万石格になったご祝儀が配られ、「大盤振る舞いをした」という記録が文書に残っている。



←大聖寺藩下屋敷跡（文京区千駄木須藤公園）

武家諸法度で、5 万石以上の大名は、馬 7 疋、足軽 60 人、人足・中間 100 人とするという決まりがあったので、大聖寺藩はそれに応じた内規をつくり実行していた。また参勤交代はこれも武家諸法度の定めに従い、107 回が 4 月に実施されていた（江戸に着いた日、江戸を出発した日をカウント）。そして歴代藩主ごとの内訳は、

初代前田利治（としはる）・・・治世 22 年、20 回

2 代前田利明（としあき）・・・治世 33 年、30 回

3 代前田利直（としなお）・・・治世 19 年、4 回

4 代前田利章（としあきら）・・・治世 27 年、26 回

5 代前田利道（としみち）・・・治世 42 年、29 回

6 代前田利精（としあき）・・・治世 5 年、3 回

7 代前田利物（としたね）・・・治世 7 年、4 回

8 代前田利考（としやす）・・・治世 17 年、12 回

9 代前田利之（としこれ）・・・治世 31 年、28 回

10 代前田利極（としなか）・・・治世 2 年、1 回

11 代前田利平（としひら）・・・治世 12 年、9 回

12 代前田利義(としのり)・・・治世 7 年、6 回

13 代前田利行(としみち)・・・不詳、0 回

14 代前田利𠂔(としか)・・・治世 15 年、9 回 であつた。



家臣が 1 年間もの間江戸で生活をすれば当然経費も高くつく。文政 4 年の記録によると、江戸で生活する家臣の費用として銀 110 貫文目かかっている。したがって大聖寺藩の財政はきりきり舞いであつた。このときには藩の総収入銀 934 貫文目のうち、330 貫文目が参勤交代のために使われており、藩の財源の内の 3 分の 1 が参勤交代に費やされたことになる。大聖寺藩は赤字を本藩の加賀藩から援助や、北前船主からの御用金で穴埋めしていた。

(5) 大聖寺藩の参勤交代コースは北陸新幹線ルートとほぼ同じである。

平成 26 年度末に北陸新幹線金沢駅が開業したが、大聖寺藩が参勤交代で使っていた道は不思議なくらい北陸新幹線のルートと同じである。大聖寺藩は合計 181 回の参勤交代を行ったが、金沢から北国街道を福井、滋賀方面に向かう「上街道」を使用したのはわずか 7 回にすぎず、そのほとんどを金沢から北国街道を富山、新潟方面に進み、長野県を通過、中山道の追分宿へと入る「下街道」コースを利用した。

大聖寺藩が行った参勤交代日程を調べたところ、加賀藩に比べると、ほとんどといっていいほど史料が残されておらず、その日程の詳細がはっきりと史料からわかったのは、わずか 9 例だけであつた。

1800 (寛政 12) 年、8 代藩主前田利考が下街道の中山道経由で行ったコースを掲載する。

◇大聖寺発 (3 月 18 日) - 松任宿 (同日) - 金沢宿 (19 日) - 高岡宿 (20 日) - 魚津宿 (21 日) - 泊宿 (22 日) - 青海宿 (23 日) - 能生宿 (24 日) - 荒井宿 (25 日) - 牟礼宿 (26 日) - 榑宿 (27 日) - 追分宿 (28 日) - 板鼻宿 (29 日) - 深谷宿 (30 日) - 浦和宿 (4 月 1 日) - 江戸着 (2 日)

このときは全部で14泊15日の行程で、131里（約524km）を歩いている。金沢から北国下街道で江戸へ達するまでには、5m以上の川幅の河川が84も流れており、そのうちの38の河川には橋がかかっていなかった。富山県の神通川・常願寺川、新潟県の姫川・大和川、長野県の犀川、千曲川、埼玉県の戸田川などは、雨が降れば川止めになった。また3月下旬は街道にたくさんの雪が残っていたと考えられる。

（6）大聖寺藩の参勤交代・一日平均40kmも歩いた。

1838（天保9）年4月23日から5月5日に実施された大聖寺藩10代藩主・利極（としなか）の参勤交代で、家臣が毎日どれぐらい歩いていたか、キロ数に計算してみると、

- 1日目 江戸（日本橋）～桶川宿（埼玉県桶川市）・・・40.8km
- 2日目 桶川宿～本庄宿（埼玉県本庄市）・・・45.0km
- 3日目 本庄宿～松井田宿（群馬県安中市松井田町）・・・39.9km
- 4日目 松井田宿～碓氷峠～小諸宿（長野県小諸市）・・・43.1km
- 5日目 小諸宿～矢代宿（長野県千曲市屋代町）・・・40.0km
- 6日目 矢代宿～善光寺～野尻宿（長野県信濃町野尻）・・・46.1km
- 7日目 野尻宿～高田宿（新潟県上越市高田）・・・36.0km
- 8日目 高田宿～糸魚川宿（新潟県糸魚川市）・・・49.0km
- 9日目 糸魚川宿～親不知・子不知～泊宿（富山県朝日町）・・・30.6km
- 10日目 泊宿～岩瀬宿（富山県富山市東岩瀬）・・・50.5km
- 11日目 岩瀬宿～高岡宿（富山県高岡市）・・・24.8km
- 12日目 高岡宿～倶利伽羅峠～金沢城下（金沢市）・・・46.6km
- 13日目 金沢城下（金沢市）～小松宿（小松市）・・・30.9km
- 14日目 小松宿～大聖寺城下（加賀市大聖寺）・・・20.1km

で総距離はなんと約540kmであった。

4 日目は標高 1194m の碓氷峠越え、9 日目が親不知・子不知の海岸線を日本海の荒波を避けながら歩く最大の難所であった。平均すると毎日 40 キロ近くも歩いていたのである。

文責 加州大聖寺藩参勤交代うおーく 2019 実行委員会事務局 小谷 邦博